



TITLE:

三月例会素見

AUTHOR(S):

宇野, 良雄

CITATION:

宇野, 良雄. 三月例会素見. 天界 1935, 15(169): 269-271

ISSUE DATE:

1935-04-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167011>

RIGHT:

三月例会素見

宇野良雄

三月十六日、午前中降つて氣づかはれた空も午後にはすつかり晴れ上り、例会開始の頃には会場たる京大樂友會館二階講演室には京都市内を初め遠く大阪、神戸よりの熱心な會員諸氏がぞくぞく詰めかけられ、司會者たる會の高城氏や池田氏がニコニコしてゐられる。山本先生を初め花山の柴田、稻葉兩先生の御顔が拜見出來、又此度倉敷天文臺より花山へ移られた荒木氏や副會長水野氏、改發氏がおいでになる。

會場の南窓際の細長い机の上には水野副會長の御出品になる日露戦役に關する記念品二百數十點が一面に並べられてゐる。明治三十何年の消印ある美人繪葉書の慰問狀や、蛇が蛙を呑む繪でその頃の日露の國際勢力が表はしてある圖、明治時代の硝石寫眞や露國語の地名の入つた滿洲や奉天附近の地圖、御下賜の扇子、從軍將士の最近の葉書等々、來會者に回顧の念と物珍らし氣の目をみはらせてゐる。

○「火星の接近」 山本一清博士 午後七時、池田氏開會を宣せられ山本博士の御講演にうつる。大型の書籍二冊を手にとられた博士は先づ近頃の火星の天球上の位置及びその運行を圖示され、光度、軌道を話され額入りの大きな火星圖を示しつつその表面の説明をされる。火星軌道と地球軌道との關係による地球火星間の距離及び二年二ヶ月の接近毎の地球火星間の距離をグラフで示される。續いて實地觀測の御話にうつり、觀測に必要な望遠鏡の口径と倍率、火星の全面の觀測には十五年間を要する事、更に花山に於ける十數年前の日本の火星觀測の開拓者故中村要氏の觀測、火星表面の觀測には特殊な技巧を要し、むしろ理學より藝術に近い心理が必要である事を述べられ、天文臺で働く人より往々かうした特殊な技能を持つたアマチュアの觀測が成功する事があると、諸外國の火星觀測家の實例を舉げてアマチュアの火星觀測の必要であり、成功するものもある事を語られる。最後に卓上に持出された米國の故ローエルと佛國のアントニアチ氏の火星に關する原書の紹介をせられ、聽講者に火星に對する知識と關心を與へ火星觀測への興味を深くそゝりつつ御講演は終る。

○「大火球を尋ねて静岡縣下へ」 柴田理學士 次で高城氏の紹介により柴田氏がその長身を壇上に現はされる。黒板に掛けられた静岡縣の略圖に掛川、清水、島田等よりの視方向を赤矢で記し消滅點を赤丸で示した圖により駿河灣の西部に一月二十五日夜出現した大火球の經路を説明され、次に實地調査に行かれた時の面白い話を出される。大火球の調査に於て一番最初に調べねばならぬ事はその火球が空中に於て消滅してしまつたか、又は隕石として何處かへ落ちたかと言ふ事である。静岡縣に行つた時には隕石落下の噂が高く、その中にこんなのがあつた。隕石がある街道に掛けられた橋に落下し、その橋を潰し尙勢が止まらず川床數尺の底へもぐり込み附近は見物人で一ぱいであるとの噂、又隕石がある村の豪農の持田に落下してその百姓はそれを神聖なものとして隕石の落下した田の周圍に縄を張り専門家が来る迄何人をも近づけないと青年團に張番させてゐるとの噂、しかし調べてみると全然根據のないことで他の報告から火球は空中で消滅した事が解り、先の噂が本當にデマであつた事になるとゼスチュア 1 を加へて眞實そうに話され、本當らしいデマに遂釣込まれる。火球の大きさに就ての報告が小はバケツ位から大は四斗樽位までがあり、出現點消滅點の全報告百數十の内に星座を示されたものが一つも無かつた事、唯一つ出現點の場所が「オリオンの三つ星の左下十間の點」といふのがあつたと話され、角度と星座の知識を充分に持つ來會者を笑はしめられる。亦消滅點の明確でない今度の様な火球にとつて觀測地とその地に於て火球が消滅してから音が聞える迄の時間が餘程重大である事を述べられ、念入りに調査せられたが田舎の人で五分と十秒との區別もつかない事、掛川で堤防を歩いてゐた時火球が出現したので立止つてちつと消滅する迄見てゐて、火球が消えて歩き出し並木を過ぎ橋を渡つて電柱迄行つた時に火球の音を聞いたといふ氣の強い女の人、亦農家で家の外で植木鉢に手を掛けてゐた時に火球が出現し消滅を見定めて家に入り室に上つて簞笥の上の置時計のネヂを掛け終つた時に火球の音を聞いたといふ百姓さん、之等にその時の通り實地にもう一度歩いてもらひタイムを計られたお話等々、御調査の御苦心と興味を話され、今後火球觀測の際の注意ともなり、面白く御講演は終る。いづれ詳しい御研究の結果は「天界」に御發表になる事であらう。

○「日露戦役實戦談と天文」(記念品陳列)― 水野副會長 最後に副會長水野氏は講演に先だつて御出品の日露戦役記念品に就て一つ一つ説明をされる、「夢記」と表紙に書かれたノートがあり、不審を抱いてみた處、戦場で毎夜見られた夢の記録であつたり、戦場で幾何や代數の勉強をやられたノートがあつたりして並んで説明を聞く者の間に笑聲が擧る。次に壇上に立たれ從軍中の思出話を初められる。内にも滿洲の寒さや從軍中の起床就床の時刻を記録され睡眠時間が十日間に三十數時間しか無かつた等科學者の精密振りを發揮される。話される内に三十年の昔に歸られて時の経過するのも忘れたかの様に次から次へと熱辯逆しり、又その頃の戦争の事や參謀部の知識を與へられた。

かくて二十二時三十分來會者に多大の満足と與へて大盛會裡に三月例會は閉會された。會場より外に出れば東南の空に火星が赤い色を見せてシーズンに王者此處にありと輝いてゐた。

(三月二十一日)

變光星課會議

近來急速な發展を示して來た當課は、その使命を一層效果的にする爲め三月二十三日夜京大樂友會館にて第一回の會合を行つた。參集は山本會長、小山課長、今津、高井、佃、鈴木、井澤、西村、木邊の課員合計九名であつた。

19時、小山課長の司會に始まり、先づ課員出席者について簡単に紹介、次いで出席者の簡単な自己紹介と今後の希望を述べ、山本會長の「歴史的に見た日本に於ける變光星觀測」及「今後の方針に對する意見」を述べられ、いよいよ本會議に入り、今後の觀測方針、觀測者の増加案、及その方法、觀測用星圖、報告、發表の仕方、豫報、觀測者相互間に於ける報知等に付き約二時間御茶も飲まぬ熱心さであつた。21時半一通り終つて冷えた紅茶に砂糖を投げ込み、紀念の寫眞を撮影、其後は各自の手柄話し、失敗話し、ビックリ話し等平和いだ氣分の内に23時に散會した。主な決定事項は

1. この様な會合を年々一回位開く事。
2. 天界に素人の興味を引く變光星の記事を掲載して大いに觀測熱をアフル様にする事。
3. 今回の新星に特殊の色硝子を二三併用して觀測して見る事等であつた。

(以上)